

第2回「奄美地域 地域振興の取組方針」見直しに係る地域懇談会 【概要】

- 1 日時
令和4年10月11日（火） 午後2時から午後4時まで
 - 2 場所
奄美会館 2階 大会議室
 - 3 参加者
 - (1) 有識者委員
 - ・春利正 委員 (前天城町教育長)
 - ・向井扶美 委員 (社会福祉法人三環舎理事長)
 - ・喜島浩介 委員 (奄美大島エコツーリズム推進協議会長)
 - ・美延睦美 委員 (NPO法人徳之島虹の会事務局長)
 - ・石田秀輝 委員 (地球村研究室代表, 東北大学名誉教授)
 - ・山腰眞澄 委員 ((株)ねりやかなや代表取締役)
 - ・田畑克夫 委員 (与論町商工会長, NPO法人海の再生ネットワークよろん代表)
 - ・前田浩寿 委員 (鹿児島県建設業青年部会奄美支部支部長)
 - ・伊村達児 委員 (伊村農園代表)
 - ・奥田忠廣 委員 (奄美群島水産振興協議会長, 奄美漁業協同組合筆頭理事)
 - ・恵枝美 委員 (奄美大島商工会議所副会頭, NPO法人まち色事務局長)
 - ・武下義広 委員 ((一社)奄美群島観光物産協会統括リーダー兼観光部リーダー)
 - ・勝眞一郎 委員 (サイバー大学IT総合学部教授, 県DX推進アドバイザー)
 - ・新川康枝 委員 (大島支庁長)
 - ※欠席
 - ・麓憲吾 委員 ((有)アーマイナプロジェクト代表取締役, NPO法人ディ代表理事)
 - ・宜名真孝子 委員 (奄美群島地域女性団体連絡協議会 会長)

※委員14名参加, 2名欠席
※オブザーバーとして10市町村が参加
 - (2) 大島支庁
- 4 議事内容
 - (1) 「奄美地域地域振興の取組方針」見直し（案）について
 - ① 概要
 - ② 第2章「時代の潮流と奄美地域の現状・課題」
 - ③ 第3章「奄美地域の目指す姿」
 - ④ 第4章「奄美地域振興の取組方針」
 - (2) その他
- 5 公開・非公開の別
公開
- 6 傍聴者
0名

【主な発言について】

② 第2章「時代の潮流と奄美地域の現状・課題」について

- 石田秀輝委員（地球村研究室代表，東北大学名誉教授）
 - ・ 第2章（現状・課題）から第4章（取組方針）への繋がりが見えにくく，総花的で平べったく，パラレルに並べたように見える。また，第2章で分類・整理した現状・課題が，第3章の姿にどう関わっていくかがわからない。
 - ・ 第3章（目指す姿）での「奄美にとって何が大事なのか」が見えない。奄美の特性を踏まえ，奄美だからこそ考えなければならない土台の部分が必要だ。「奄美で何を大事にすべきか」を絞り込んでも良いのではないか。
 - ・ 離島は非常に厳しい状況にあるが，では何が厳しいのかという議論があってはじめて第3章（目指す姿）ができる。

- 勝眞一郎委員（サイバー大学IT総合学部教授，県DX推進アドバイザー）
 - ・ 稼ぐ力について，「稼ぐ（生産）」だけでなく，「分配する」，「支出する」という分野も記述しないと地域経済という面で偏りが生じてくる。
 - ・ 県立高校の現状について，島外からの学生をどう増やしていくかの現状・分析があると良い。

- 石田秀輝委員（地球村研究室代表，東北大学名誉教授）
 - ・ これからの世界では，いろいろなものが循環する事が資本だと定義されてきている。奄美では，結という奄美らしいシステムも残っている，お金を稼ぐというだけでなく，自然も稼ぐ，人も稼ぐという見方も必要になってくる。

- 勝眞一郎委員（サイバー大学IT総合学部教授，県DX推進アドバイザー）
 - ・ 「世界自然遺産登録の効果」は経済（効果）以外にもあると思う。世界自然遺産登録は奄美群島全域での環境保護を加速する効果もあるのか。

- 喜島浩介委員（奄美大島エコツーリズム推進協議会長）
 - ・ ある。おそらく「自然を守りながら」という意識が高くなる。

- 勝眞一郎委員（サイバー大学IT総合学部教授，県DX推進アドバイザー）
 - ・ 機運が醸成されることも「世界自然遺産登録の効果」と言えるのだろう。

- 向井扶美委員（社会福祉法人三環舎理事長）
 - ・ 小規模校が増えてきているとあるが（資料5第2章9・P6），小規模だから無くしてしまえば良いという訳ではない。発達障害など特性がある生徒は大勢の生徒がいると難しく，小規模校だと社会的なスキルを高めることができている。全国的にも特別支援教室が増えてきており，発達障害のお子さんが増えている現状だ。特に高校が大事で，大島北高などは特別支援教育はやっていないが，先生方が進級・卒業させようと一生懸命サポートをやっている。小規模校を無くす方向なのか維持して大事にしていくのか，これからの繋がるように記述してほしい。

- 山腰眞澄委員（(株)ねりやかなや代表取締役）
 - ・ これから土地の価格の高騰はもっと顕在化すると思われ、地元の人が家建てられないという状況にも繋がる。それに対して手を打つ必要がある。おそらくは持ち主不明の土地が多く、限りある土地の値段が上昇していることが原因と思う。土地対策はきちんと考えておいた方が良い。
 - ・ 子供達が島に戻ってくることを考えた時に、サービス業や観光業など、子供達が島で生きていく術・スキルを身につけられる学びの場があればと思う。大学とまでは言わないが、ホテルスクールや料理学校など、そういった場がもう少しあっても良い。

- 前田浩寿委員（鹿児島県建設業青年部会奄美支部支部長）
 - ・ 土地の値段は観光業が発展すればするほど上がっていく。子供達が島外に出ていき、やがて親の土地を売ってしまい、奄美の土地のほとんどが島外者の所有になることを危惧している。実際に、ある地域ではそういう現状にあるとも聞いている。
 - ・ もっと具体的な事項を課題として挙げても良いのでは。例えば、国土強靱化についてだと、本土復帰後インフラ整備が進み、豊かな道路・港湾施設が作られてきたが、自然と共存をしていくうえで、「どう維持していくか」という視点も必要となる。

第3章「奄美地域の目指す姿」及び第4章「奄美地域振興の取組方針」について

- 石田秀輝委員（地球村研究室代表、東北大学名誉教授）
 - ・ 奄美群島の最大の問題は何かということが反映されないといけない。沖永良部という域内生産400億円に対して、域内収支は170億円のマイナスとなっており、島を維持できるかという絶対不可能だ。経済的な問題と地球環境という点が第2章（現状・課題）から取り出され、第3章（目指す姿）を語る上で土台になると思う。
 - ・ そこで「縮減」と「持続」という概念が必要になってくる。カーボンニュートラルはやって当たり前で、持続可能な奄美群島ということ考えた時に、エネルギー、食、教育といった様々な部分で「持続」という概念を大事にしていく必要がある。第3章（目指す姿）を語るためには、島内の依存を増やし、経済や環境の負荷を減らしていくということが必要。持続可能な奄美群島という視点も入れて議論をしていただきたい。

- 武下義広委員（(一社)奄美群島観光物産協会統括リーダー兼観光部リーダー）
 - ・ 航空路線の維持（資料5第4章1(1)・P8）について福岡は入っていないのか。
 - ・ 奄美群島の出産（資料5第4章2(2)・P11）について、宿泊費や交通費に対する助成に関する記述があるが、そもそも出産の安全・安心を考えたときに、地元で出産できる環境に努めていけるような記述ができないか。
 - ・ コロナ禍により人の流れの制約が生じ、外貨が稼げない中で、奄美群島では製造業にも力を入れる必要があると感じる。
 - ・ 離島としてのハンデをクリアするには情報関連産業の分野も力を入れるべきとも感じる。項目の頭に出す必要があるのかなと感じた。

- 山腰眞澄委員（(株)ねりやかなや代表取締役）
 - ・ 第3章（目指す姿）について、（第2章などで）世界自然遺産のことを入れているのであれば、「自然との共存」などのキーワードも入れておかないと他との違いが出ない。
 - ・ 第4章（取組方針）においても、「1 世界自然遺産登録を契機とした、多様で魅力ある奄美群島の振興」以外では、どのように自然と共存していくか、稼いでいくか、自立していくのかが見えにくい感じがする。ものすごく大きな税金を使って大きな政府をやるという風に見えてしまうが、これから人口減少により、できることとできなくなることがわかってくる。自分達でやらないといけないことと行政の支援を受けることと、ある程度それを前提に組み込んで良いかと思う。
- 美延睦美委員（NPO法人徳之島虹の会事務局長）
 - ・ 奄美地域の目指す姿に「自立」という言葉が出ていない。離島は置き去りになりがちで、予算にしても離島は本土のおこぼれがくるという風を感じている。世界自然遺産の取組に関しても、徳之島は沖縄奄美自然環境事務所のおこぼれでやっているように感じる。できることは自分達でやっていくという心構えが必要で、何でも頼りにして待っている姿勢ではダメ。自分達で自立して知恵と工夫で島を興す考えのもとに地域振興を進める必要がある。「自立して暮らしていけるような」など、自立という言葉はどこかに使っていたきたい。
 - ・ 第2章（現状・課題）で様々な課題が出てきたが、解決には全て人が関わる。まずは「人」が大事。プランニングする人やコーディネーターする人、リーダーとなる人など、中心となる人を育てなければ地域を引っ張っていけない。育成についても記述を入れてほしい。
 - ・ 「2 未来を拓く人づくり（資料5第4章2(1)・P10)」には、奄美地域への教育旅行の実施に関する記述があるが、島の子供達への環境教育に関する記述がない。奄美では1月に桜が咲くが、奄美には日本の教科書では学べない自然環境が沢山ある。それなのに地元の子供がそれを学ぶ機会がない。自然を保全・活用する人の力を育てていくために、どこかに子供達への環境教育に関する記述を入れてほしい。
- 向井扶美委員（社会福祉法人三環舎理事長）
 - ・ 徳之島では民間医療と行政が一緒になって、産科医に島に居てもらおうと長年に渡り一生懸命活動をされている。産科医の派遣や確保など、助産師も含めた産科医療の体制づくりに関しても踏み込んで具体的に書いていただきたい。
 - ・ 特別支援教育に関して就学・進学時の切れ目のない支援の推進、企業等との連携した就労支援などに取り組む旨が記述されているが（第4章4(4)・P25）、実際には教育と福祉とが連携しないと就労までいくことは困難だ。特別支援教育に関しては教育と福祉との連携を盛り込んでいただき、特に就業生活支援センターや就労移行支援や就労定着支援など事業所との連携など、障害者が働きやすい環境を作っていくことを加えていただければありがたい。

- 伊村達児委員（伊村農園代表）
 - ・ ハカマの粗飼料利用は非常に良い取組で、記述として出てきたのはうれしい。琉球大学にはその分野の教授がおり、必要があればおつなぎできる。
 - ・ 畜産やばれいしょは、肥料価格が2.5倍ぐらい上がっており、農家全体が不安を抱えている状況。おそらく高齢者の多くが農業を諦めていく。畜産では1トンあたりの売値が平均5万円ぐらい下がっており、ますます厳しい状況だ。2030年にどういう農業をしているのか不安であるが、今後、多くの高齢者が辞めていき、空いた畑が出てくる、UIターンの若者が入ってこれるような農業の将来像が盛り込めればと思う。やはり人が大事だ。
- 勝眞一郎委員（サイバー大学IT総合学部教授、県DX推進アドバイザー）
 - ・ 一番重要なのは第3章で「我々はどこに行きたいのか」という点だが、奄美らしさをキーメッセージとして出さないと奄美の特徴が出ない薄いものになってしまう。委員の発言をまとめると「奄美の自然と文化を生かしたコンパクトで持続可能な社会の形成」といったものになるのだろう。それを踏まえて、「人」、「社会」、「産業」の3カテゴリで整理していくという形だろう。第2章（現状・課題）も第4章（取組方針）もその3カテゴリで整理するとすっきりとした構造となるだろう。自立という言葉は「孤立」というイメージにも繋がるが、「いろいろな関係性を多様に持っている状態」なのだと思う。
- 恵枝美委員（奄美大島商工会議所副会頭、NPO法人まち色事務局長）
 - ・ （要検討）奄美群島は離島であるため、輸送費がプラスされ価格が上昇する。目指す姿においても、価格面など離島のハンデを克服できるような産業づくりについて触れていただきたい。
 - ・ 世界自然遺産登録を契機として、奄美黒糖焼酎や本場大島紬など奄美の産品に「奄美ブランド」として適正な価値が付き、価格にも転嫁できればと思う。みんなで価格を上げていって、所得もより上がってほしい。
- 田畑克夫委員（与論町商工会長、NPO法人海の再生ネットワークよろん代表）
 - ・ 発言の中で「自立」という言葉が出てきたが、奄美群島においては自分達で調達できず、どうしても本土の物資に頼らざるを得ない面がある。ヒト・モノの交流の中で、島民に負荷を与えていることも考えなければならない。本文の中には輸送コストの軽減という言葉があるが、群島全体で検討していただきたい。台風シーズンになると1週間ぐらい生活物資が滞る。
- 前田浩寿委員（鹿児島県建設業青年部会奄美支部支部長）
 - ・ 今いる子供達に対するアプローチが無いのではないか。例えば山羊など奄美の食文化を子供たちに伝えることが謳っていない。今あるものの良さを子供達に伝えることも大事。食文化を通じて奄美の良さを伝えることは観光業や漁業などにも繋がる。結いの精神などが薄れていっているのでは。

○ 春利正委員（前天城町教育長）

- ・ 世界自然遺産に登録され、生態系を維持して管理をすることが大事になるが、地域の様々な分野の中で子供達の学ぶ場を作り、連携をとりながら人材育成につなげてくることが必要だ。食文化をどう伝えるかは各学校でよく取り組んでいる状況ではあるが、それを学ぶ拠点も必要ではないか。

○ 喜島浩介委員（奄美大島エコツーリズム推進協議会長）

- ・ 世界自然遺産に何故なったのか、その出発点から説いていく場所・仕組みが教育現場に欲しい。世界自然遺産の利用やバランスについて大事なことを理解してもらい高校を卒業して欲しい。年配者に比べ、小学生・中学生の関心は高くない。

○ 奥田忠廣委員（奄美群島水産振興協議会長、奄美漁業協同組合筆頭理事）

- ・ 漁業に携わる者として、奄美の食文化は無くなっている。シラヒゲウニは夏の食文化だったが現在は壊滅状態。4年前から種苗生産に取り組んでいる。来年の春には各漁協の生産者の皆さんに配布できる状況になっている。
- ・ 施策について予算が無ければ何もできない、ではどうするのだが、奄美振興交付金を増やしてもらってソフト面でしっかり対応していくべきだ。奄振29億円に比べ沖振は3,000億円。奄美全体で考えるべき話だが、予算の確保が一番大事な気がしている。奄振交付金をなんとかして確保していかなければ、ここにある取組もどれだけ実現できるか疑問。

7 今後について

今回いただいた御意見等を踏まえ、取組方針の素案等を再検討。12月開催予定の「第3回地域懇談会」(書面開催)にてお示しする予定。※別途御案内予定

以 上